

報道関係各位

2003年9月24日
博報堂生活総合研究所
博報堂 広報室

博報堂生活総合研究所
新しく「未来生活研究室」を発足
(Future Life Lab)

博報堂生活総合研究所では、10月1日より、研究所内に新しく「未来生活研究室 (Future Life Lab)」を発足させることになりましたので、お知らせいたします。

「未来生活研究室」は、博報堂生活総合研究所および博報堂研究開発局を中心に、博報堂社内各部門が従来持っていた未来予測能力をより効果的に発揮するために生まれた連携型の研究室です。

従来の未来予測は、ありうる未来(技術の未来)、あるべき未来(有識者の考える未来)という観点が中心でした。未来生活研究室では、博報堂生活総合研究所が今までフィールドにしてきた生活者視点を生かした ありたい未来(生活者の願う未来)という考え方を加え、3つの視点から未来生活を大局的に、さらに、実感的に捉えていきます。

また、未来生活研究室では、「Future Life Magazine (未来マガジン)」というタイトルのウェブマガジンの発行 未来年表(未来データベース)の整備 未来生活予測手法に関する基礎研究 生活予報の発行 をおもな活動として、今後取り組んでいく予定です。

また、活動の成果は、10月15日よりオープンするウェブサイト「futurelifelab.com」を通じて、常時発信いたします。(URL <http://futurelifelab.com>)

不況が続くなか、先が見えないと言われる日本の未来ですが、「未来生活研究室」は、「ミクロ視点×マクロ視点で探索」し、「未来生活をデザインする」ためのナレッジ開発のために、社内だけでなく社外(生活者、有識者)とのネットワーク作り、コラボレーションを行っていく「場」としても機能していきます。

未来生活研究室の4つの活動

Future Life Magazine (未来マガジン)

生活者の未来予兆と、有識者のナレッジを組み合わせ、未来への航海図を提示していくWEBジャーナルを発信します。第1回目のテーマは、「エネルギーと環境」、第2回目のテーマは、「エンターテインメント/メディア」を予定しています。

未来年表(未来データベース)

様々な生活ジャンル毎の未来スケジュールを整理し、仕事、研究のデータベースとして活用できるようにします。従来の未来年表にあるような未来技術の羅列ではなく、技術が未来の生活者や社会にもたらす意味がわかる年表です。

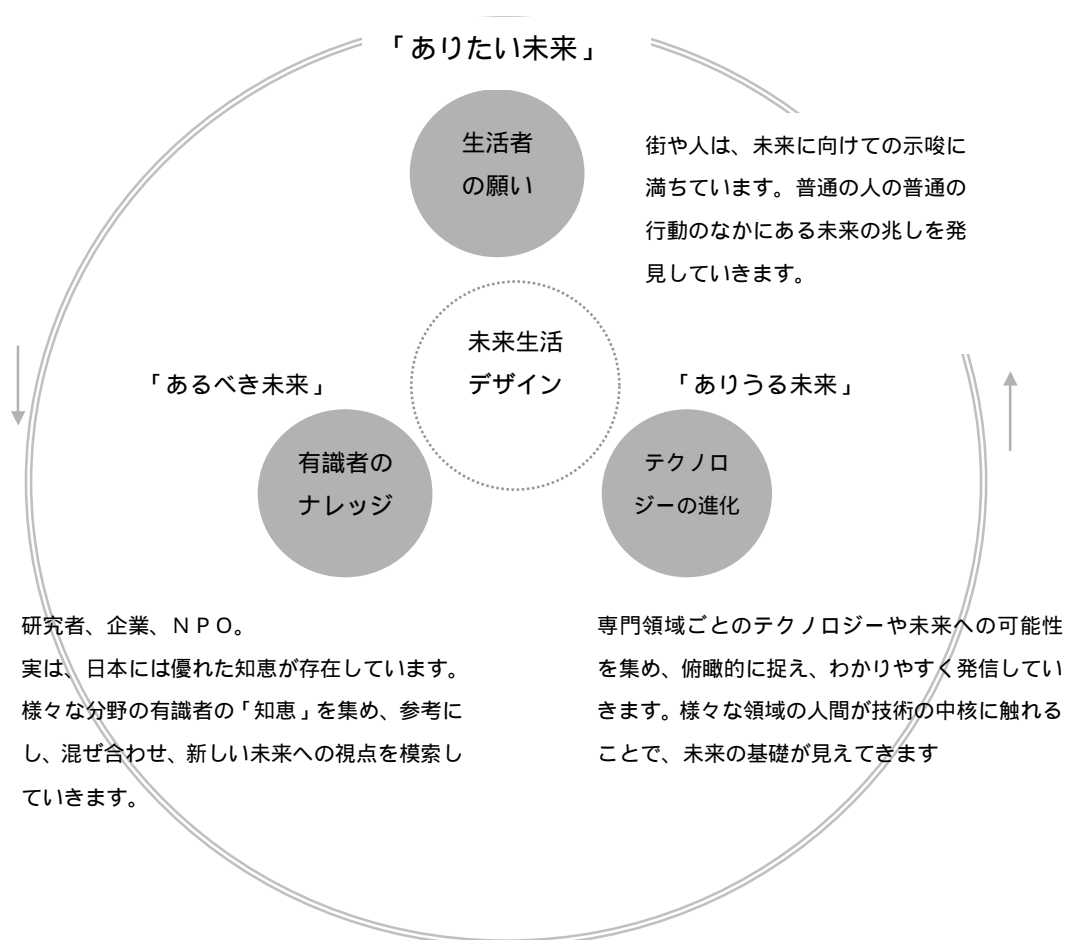
基礎研究

未来生活をデザインするための手法は、いろいろな分野で開発されていますが、未来生活研究室では、未来を探索する3つの視点をベースにしたユニークなノウハウを研究・開発し、発表していきます。

生活予報

従来、博報堂生活総合研究所から発行してきた生活予報を、2004版(2003年末発表)から、博報堂生活総合研究所・未来生活研究室から発行していきます。この研究室で生まれ、開発された未来予測手法を駆使し、新型生活予報に活用していきます。

未来生活研究室の3つの視点



< 本件に関するお問い合わせ >

博報堂生活総合研究所 林・原・和波 03-3233-6450

< 資料 >

未来研究室 開設にあたって

Future Life Labの目的は、「未来を考えてもらう」こと。

未来生活研究室がスタートします。

生活者の視点で未来を考えるプロジェクトです。

このプロジェクトでは、未来を考えるとときに有効な「考え方の枠組み」や、「考える手段」「使えるデータ」などを発信していきます。

時には、「未来を見通した提言」を行うこともあります。私たちの主な目論みは、皆様に未来を考えていただくことです。そして、その未来を考えていただく際に、使える情報をご提供したいと考えているのです。

「未来」とは、すべての企業や行政組織にとって、必須の視点です。これから先、どうしたらいいのか、どっちに行ったらいいのか、何をしたらいいのか。いずれも未来を考えることです。

「未来」とは、「過去」から始まり、「現在」を通過し、これから行く方向です。その方向を考えるとときには、「当たり前」のことを疑ってかかることも必要です。

自分の未来の一つの可能性である「自分の子供」を例にとりましょう。よくある会話で「そろそろ、ウチの子供も俺の身長を追い越しそうだよ」というものがあります。だれも大した疑問を持たずに、「子供というものは自分を追い越すもの」と思って話をするわけです。

しかし、よく考えてみると、過去から現在まで、多くの家庭で、子供が親の身長を追い越して成長していたとすると、現在の人間の身長は4メートルや5メートルにもなっていないとはいけないはずです。

つまり、方向は「上昇ひとつだけ」なんてことは決してない、ということなのです。

もう一つ、このプロジェクトを準備する過程で、SF作家の小松左京さんとお会いしたときに出てきた話をご紹介します。

今現在、市場で元気に消費されているモノに携帯電話やパソコンといった情報機器があります。これら情報機器の主な使いこなし手は若者たちです。新しい機能や使い方をいとも簡単にこなしてしまします。大人達はおずおずと、その後ろからついていっただけです。

しかし、いままで私たちが手に入れてきた文化や文明は、まず大人達が導入し、使いこなし、その成果を次の世代に受け渡すという過程をへて、現在に至ってきたはず。そうして受け渡しが行われるからこそ、いろいろなものが継承され、蓄積されてきたのではないのでしょうか。

それがいまはどうでしょう。若い方から始まって上の年代に伝播していくのでは、蓄積なんか起こるはずありません。これが現在社会の混沌の所以の一つかもしれない、ということです。

いずれにしても未来は不確定です。未来を考えれば考えるほど、わからなくなります。しかし、わからないかもしれないけれども、少しでもわかるために努力することは無駄ではありません。この未来生活研究室は、これから少しでも未来をわかるために、努力していきますので、皆様も一緒に「未来」を考えていきましょう。

博報堂生活総合研究所 所長代理 林 光

Webサイトについて

博報堂生活総合研究所・未来生活研究室 (Future Life Lab) の活動は、10月15日、futurelifelab.com のスタートで始まります。

このウェブのなかで、Future Life Labの活動の成果をおもに発表していきます。

Future Life Magazine 1.0(創刊号)

未来への旅の出発点としての「環境とエネルギー」

自分が「どこ」にいるのかを確認してみよう。自分たちの生活は、今どこにあって、どうしてここに来たのか。それを知らずして未来を予想することなどできない。創刊号であるフェイズ1では、これからの未来生活デザインにむけてのベースとして「苗床」のようなものをつくれたらと考えています。そして、その苗床にふさわしいテーマである「環境とエネルギー」から、Future Life Magazine はスタートします。